

大字誌についての社会学的考察

東京国際大学 高田知和

1 目的

本報告は、字、大字、町内会・自治会、あるいは公民館や学校区の範囲の歴史を、そうした地域が編集・刊行主体となってまとめた地域史誌について考察するものである。このような地域史誌を示す呼称は統一されていないので（近年沖縄ではこれを「字誌」と呼び、それが他の地域にも適用されつつあるが確固たるものではない）、本報告ではこれを大字誌と呼んでおく。具体的にはこのような大字誌が編集・刊行されている状況を明らかにすることと、大字誌が持っている意義を社会学の立場から考えていくことが、本報告の目的である。

2 対象・先行研究

これまで大字誌についての研究は決して盛んであったとはいえない。まず、歴史学は研究対象としてこなかった。同種の刊行物として自治体史（都道府県や市区町村の史誌）があるが、自治体史と違って、ほとんどの場合その地域に居住する一般の人たち（＝歴史学を専門としていない人たち）が調べて既刊の本や二次資料などを用いて書くものであるため、一般の歴史学の本とは認識されていないからだと思われる（ただし木村礎などかつての一部の歴史学者たちは言及している）。また当該地域の歴史を書くうえで良質の史料はなかなかないので聞き取り調査が多用されて民俗や生活についての記述も多いのであるが、社会学でも研究対象として来なかった。そこには、社会学と歴史学など一つ一つの分野で寸断されて互いの領域には足を踏み入れないという不文律のような事情が介在しているように感じられる。

このような状況である大字誌についての先行研究は、沖縄のいわゆるやんばる地域（本島北部）を中心に地域研究をしてきた中村誠司の一連の論考と、社会教育の実践と捉えて沖縄の「字誌」を調査してきた末本誠（神戸大学）の業績に集約されるといってよい。これらはいずれも沖縄で作られている「字誌」を対象としたものであり、その限りでは貴重な先行研究と言えるが、大字誌をつくることは沖縄に限ったことではない。そこで本報告では、これを全国的な視野に立って考えていく。

3 方法

本報告では、まず大字誌が全国でどの程度作られてきたか、また作られているかを概観する。ただし全国状況を隈なく調べることは不可能なので、地域的な違いと特徴的な地域について述べていく。ついでそれがどのように作られているかを、上記の先行研究も用いながら説明する。また作られている組織や体制、その作られ方、そして何よりもその内容を検討し、特にそれが作られる契機と、公的な意識について述べていく。その際、参照の対象として自治体史をも挙げながらその特徴を説明する。

4 結論

大字誌を概観すると、個人で作るのではなく地域主体で作られているため、当然ながら公的性格を持っている。したがって意識的に書かない「歴史」もあるし、当事者性も強い。また、学校（小中学校）の教員だった人物がリーダーシップを取っている場合が多い。その際、新興住宅地の四、五十年史とか町内会創設何十年史といったものも多く作られているので、その地域の歴史が新しいか古いかは特に問題ではない。まちづくり事業の一環で作られることも多いが、それを用いてまちづくりに活用するというより、実際には記録としてまとめておく性格が強い。このように概観可能な大字誌が地域住民にとってどのような意義を持っていると社会学から指摘できるのかを、本報告では検討していきたい。

*本報告は、平成24～26年度科学研究費補助金基盤研究(C)「地域誌の編纂と歴史意識の形成—自治体史・字誌に関する基礎的研究—」（課題番号24530649、研究代表者：高田知和）の研究成果の一部である。